

令和5年度病虫害発生予報第2号の発表について

このことについて、次のとおり発表したもので送付します。

《予報の概要》

作物名	病虫害名	予想発生量	作物名	病虫害名	予想発生量
麦 類	赤かび病	並	タマネギ	べと病	多
	黒節病	並		腐敗病	並
	斑葉病	並	ニンニク	春腐病	やや多
	裸黒穂病	並	タマネギ、 ニンニク	さび病	やや多
	アブラムシ類	やや少		うどんこ病	やや多
水 稲	もみ枯細菌病 (苗腐敗症)	並	イチゴ (本圃)	灰色かび病	やや多
	イネミズゾウムシ	並		ハダニ類	やや多
カンキツ	黒点病	並		野菜、花き の共通害虫	アブラムシ類
	かいよう病	やや多	ネギアザミウマ		やや多
	灰色かび病	やや多			
	アブラムシ類	並			
	ミカンハダニ	やや多			
モ モ	せん孔細菌病	多			
	灰星病	並			
	モモハモグリガ	やや少			
	アブラムシ類	並			
	ナシヒメシンクイ	やや多			
カ キ	炭疽病	やや多			
	うどんこ病	やや多			
	フジコナカイガラムシ	多			
ブドウ	べと病	並			
果樹の 共通害虫	クワゴマダラヒトリ	少			

太文字の病虫害：向こう1か月の間、発生状況に特に注意を要する病虫害を示す。

*予報根拠中の記号

- (+)：発生量を多くする要因
- (-)：発生量を少なくする要因
- (±)：発生量が平年並になる要因

令和5年度 病害虫発生予報 第2号（5月）

A. 麦類の病害虫

1. 赤かび病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 4月下旬のはだか麦および4月上中旬の小麦での発生は平年と同様に認めなかった。(±)

(2) 4月下旬の赤かび病感染・発病好適条件の発現回数はやや少なかった。(－)

(3) はだか麦および小麦の開花期はやや早かった。(－)

(4) 5月の気象は気温が高く(+)、降水量は平年並か多い(+)予報である。

対 策 (1) 発生を認めた圃場では早急に追加防除を実施する。

(2) 播種期別の開花期や感染・発病好適条件の発現状況などを病害虫防除所のホームページに掲載しているので、防除時期等を参考に的確な防除を実施する。

(3) 適期に収穫し、被害粒が発生した場合はライスグレーダーを用いて被害粒の除去に努める。

2. 黒節病

予 想 発生量 : 並

根 拠 4月下旬のはだか麦での発生は平年並(±)、4月中旬の小麦での発生は平年と同様に認めなかった(±)。

対 策 本病は種子伝染するので発病圃場からは採種しない。

3. 斑葉病

予 想 対象作物 : はだか麦

発生量 : 並

根 拠 4月下旬のはだか麦での発生は平年と同様に認めなかった。(±)

対 策 (1) 本病は種子伝染するので発病圃場からは採種しない。

(2) 本病対象の種子消毒を徹底する。

4. 裸黒穂病

予 想 対象作物 : はだか麦

発生量 : 並

根 拠 4月上中旬および4月下旬のはだか麦での発生は平年と同様に認めなかった。(±)

対 策 (1) 本病は種子伝染するので発病圃場からは採種しない。

(2) 本病対象の種子消毒を徹底する。

5. アブラムシ類

予 想 発生量 : やや少

根 拠 (1) 4月下旬のはだか麦および4月上中旬の小麦での発生量は少なかった。(－)

(2) 県予察圃場での4月下旬の発生量はやや少なかった。(－)

(3) 5月の気象は気温が高く(+)、降水量は平年並か多い(－)予報である。

対 策 1穂当たり7～11頭(寄生穂率に換算すると60～80%)寄生している圃場では、早急に防除を実施する。

B. 水稻の病害虫

1. もみ枯細菌病（苗腐敗症）

予 想 発生時期： 育苗期
発生量： 並

根 拠 (1) 前年の早短期水稻および普通期水稻での発生は認めなかった。(－)
(2) 5月の気象は気温が高い予報である。(＋)

対 策 (1) 種籾は健全な圃場から採種したものをを用いる。
(2) 塩水選を必ず行い、汚染籾を除去する。
(3) 種子消毒を丁寧に行う。
(4) 高温（30℃以上）で出芽期間が長い場合に発生が多いので、出芽時の温度管理に注意する。

2. イネミズゾウムシ

予 想 発生時期： 早い（越冬成虫50%飛翔開始時期：4月第4半旬）
発生量： 並

根 拠 (1) 越冬成虫の飛翔に必要な有効積算温度の達成時期は早かった。(＋)
(2) 前年の第1世代成虫の発生量は、早短期水稻ではやや少なく（－）、普通期水稻では平年並であった（±）。
(3) 5月の気象は気温が高い予報である。(＋)

対 策 (1) 前年、発生が多かった地域では、移植前に育苗箱施薬を行う。本虫対象の育苗箱施薬を行っていない圃場では、本田期の薬剤防除を行う。
(2) 根が健全に育つようにできるだけ浅水管理し、成虫の葉の食害が多い圃場では早めに中干しを行うことで幼虫の被害が軽減できる。

C. 果樹の病害虫

－カンキツ－

1. 黒点病

予 想 発生量： 並

根 拠 (1) 一般圃場での前年の発生量はやや少なかった。(－)
(2) 5月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)

対 策 伝染源である枯枝を除去し、5月中下旬に薬剤を散布する。

2. かいよう病

予 想 発生地域： 中晩生カンキツ栽培地
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 一般圃場での前年秋期の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(2) 5月の気象は気温が高く（＋）、降水量が平年並か多い（＋）予報である。

対 策 (1) 適正な肥培管理を行い、樹勢を健全に保つ。
(2) 前年の罹病した枝葉は除去する。
(3) 防風対策を行い、新葉の損傷を防止する。
(4) 中晩生カンキツ等の罹病性品種は、5月下旬に薬剤防除を実施する。

3. 灰色かび病

予 想 発生量： **やや多**

根 拠 5月の気象は気温が高く（＋）、降水量が平年並か多い（＋）予報である。

対 策 満開期から落弁期にかけて、薬液が花弁に十分かかるように散布する。

4. アブラムシ類

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 (1) 県予察圃場での4月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 一般圃場での4月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(3) 5月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並が多い(-) 予報である。
- 対 策 寄生を認めたら早めに薬剤防除を実施する。

5. ミカンハダニ

- 予 想 発生量 : やや多
- 根 拠 (1) 県予察圃場での4月下旬の発生量はやや多かった。(+)
(2) 一般圃場での4月下旬の発生量はやや多かった。(+)
(3) 5月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並が多い(-) 予報である。
- 対 策 (1) 100葉調査で、1葉当たりの寄生雌成虫数が0.5~1頭になれば防除する。
(2) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

—モ モー

1. せん孔細菌病

- 予 想 発生量 : 多 (令和5年4月28日付け調査速報第2号発表)
- 根 拠 (1) 県予察圃場での4月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 一般圃場での4月下旬の発生量はやや多かった。(+)
(3) 5月の気象は降水量が平年並が多い予報である。(±)
- 対 策 (1) 例年発生の多い園地では、定期的に薬剤防除を実施するとともに、果実への感染を防止するため早めに袋かけを行う。
(2) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。
(3) ストレプトマイシン剤(アタッキン水和剤含む)を使用する場合は、収穫前日数に注意する。
(4) 発病枝は伝染源となるので、見つけ次第除去し、処分する。
(5) 病原菌は葉や果実の自然の開口部(気孔、水孔等)や傷口から侵入するので、風当たりの強い園地では防風ネット等の防風対策を施すとともに、コスカシバ、キクイムシ、モモハモグリガ等の害虫防除を徹底し樹勢低下を防止する。

2. 灰星病

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 (1) 一般圃場での4月下旬の花腐れの発生は認めなかった。(±)
(2) 5月の気象は降水量が平年並が多い予報である。(±)
- 対 策 (1) 5月下旬から定期的に薬剤防除を実施する。
(2) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。
(3) 例年発生の多い園地では、5月中旬~6月中旬に2~3回薬剤防除を実施する。

3. モモハモグリガ

- 予 想 発生量 : やや少
- 根 拠 (1) 県予察圃場のフェロモントラップにおける誘殺は平年と同様に認めなかった。(±)
(2) 一般圃場では4月下旬の発生は認めなかった。(±)
(3) 5月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並が多い(-) 予報である。
- 対 策 5月中旬の第一世代成虫最盛期に薬剤防除を実施する。

4. アブラムシ類

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 県予察圃場では4月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(2) 一般圃場での4月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(3) 5月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か多い(-) 予報である。

対 策 寄生を認めたら早めに薬剤防除を実施する。

5. ナシヒメシンクイ

予 想 発生量 : やや多

- 根 拠 (1) 県予察圃場のフェロモントラップにおける誘殺数はやや多かった。(+)
(2) 県予察圃場での4月下旬の発生量はやや多かった。(+)
(3) 一般圃場では4月下旬の発生量はやや多かった。(+)
(4) 5月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か多い(-) 予報である。

対 策 (1) 早めに袋がけを行い、無袋栽培では10日間隔で薬剤防除を実施する。
(2) 芯折れ枝を早めに剪除し、中から幼虫が脱出するのを防ぐ。
(3) 樹上及び地面に落下した被害果は処分する。

ーカ キー

1. 炭疽病

予 想 発生量 : やや多

- 根 拠 (1) 一般圃場での前年秋期の発生量は平年並であった。(±)
(2) 5月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か多い(+) 予報である。

対 策 (1) 発病枝は見つけ次第除去し、処分する。
(2) 前年多発した園地では、5月中旬～6月中旬に2～3回薬剤防除を実施する。

2. うどんこ病

予 想 発生量 : やや多

- 根 拠 (1) 一般圃場での4月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(2) 5月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(+)

対 策 新梢伸長期(5月中下旬)に1～2回薬剤防除を実施する。

3. フジコナカイガラムシ

予 想 発生量 : 多(令和5年4月12日付け調査速報第1号発表)

- 根 拠 (1) 一般圃場での前年秋期の発生量は多かった。(+)
(2) 一般圃場での4月下旬の発生は多かった。(+)
(3) 5月の気象は気温が高い予報である。(+)

対 策 (1) フジコナカイガラムシの成虫、卵のう、3齢幼虫はろう物質に覆われ薬液をはじいてしまい、薬剤による防除効果が劣ることがあるため、1～2齢幼虫主体の時に薬剤散布する。
(2) 本種は薬剤がかかりにくい新梢基部や樹皮の間隙に潜んでおり、薬剤のかけむらがないように十分な薬量をていねいに散布する。特にスピードスプレーヤー(SS)による防除では、かけむらができないよう走行経路を見直すなど、注意が必要である。

ーブドゥー

1. ベと病

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 一般圃場での前年の発生量はやや少なかった。(–)
(2) 5月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(+)

対 策 初期感染防止のため、5月上旬に薬剤防除を実施する。薬剤散布は十分かかるよう、丁寧に実施する。

ー果樹の共通害虫ー

1. クワゴマダラヒトリ

予 想 対象作物： カンキツ、モモ、カキ、ブドウ、ナシ、ビワ、
キウイフルーツ等

発生地域： 山林隣接園地

発生時期： 5月下旬まで

発生量： 少

- 根 拠 (1) 前年の県予察圃場での予察灯における誘殺数は少なかった。(－)
(2) 前年秋期の産卵植物（アカメガシワ）での巣網の発生量はやや少なかった。(－)
(3) 春期の産卵植物（アカメガシワ）周辺の雑草において、越冬幼虫の発生はやや少なかった。(－)

- 対 策 (1) 園地内の雑草などでの発生が多い場合は、直ちに防除する。とくに雑木林に近い園地周辺部での発生状況に注意する。
(2) 老齢幼虫には効果が劣るので、防除が遅れないように注意する。

D. 野菜の病害虫

ータマネギー

1. ベと病

予 想 発生量： 多（令和5年4月25日付け注意報第1号発表）

根 拠 (1) 4月下旬の発生量は多かった。(＋)

(2) 5月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)

- 対 策 (1) 被害残さを速やかに除去し、適正に処分する。
(2) 周辺圃場を含めて圃場を見回り、発生を確認した場合は直ちに薬剤散布する。
(3) ネギのべと病は、タマネギのべと病と同一の病原菌であるので、今後定植が多くなるネギの発病にも注意する。
(4) 排水不良は発病を助長するので、圃場の排水を良くする。
(5) 薬剤散布を行う場合には耐性菌の発生を回避するため、同一系統薬剤の連用は避ける。

2. 腐敗病

予 想 発生量： 並

根 拠 (1) 4月下旬の発生量はやや少なかった。(－)

(2) 4月下旬のネギアザミウマの発生量は平年並であった。(±)

(3) 5月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)

- 対 策 (1) 病原菌は茎葉の傷口から侵入するので、強風雨や農作業の前後に防除を行うとともに、ネギアザミウマなどの害虫防除を行う。
(2) 伝染源となる腐敗株は早期に抜取り、圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(3) 排水不良は発病を助長するので、明渠などによって排水対策を徹底する。
(4) 貯蔵する場合には、通風をよくして本病の発生を防ぐ。万一貯蔵中に発生した場合は伝染源となるため、罹病鱗茎を速やかに貯蔵場所から持ち出して適切に処分する。
(5) 同一の病原菌によって発生するニンニクの春腐病にも注意する。

－ニンニク－

1. 春腐病

- 予 想 発生量 : **やや多**
- 根 拠 (1) 4月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 5月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くする。
(2) 被害残さを速やかに除去し、適正に処分する。
(3) 病原菌は茎葉の傷口から侵入するので、強風雨や農作業の前後に防除を行うとともに、ネギアザミウマなどの害虫防除を実施する。
(4) 同一の病原菌によって発生するタマネギの腐敗病にも注意する。

－タマネギ、ニンニク－

1. さび病

- 予 想 発生量 : **やや多**
- 根 拠 (1) 4月下旬の発生はタマネギでは平年と同様に認めず(±)、ニンニクでの発生量は多かった(＋)。
(2) 5月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 発生圃場では薬剤を散布する。
(2) 同一の病原菌によって発生するネギ、ニラのさび病にも注意する。

－イチゴ(本圃)－

1. うどんこ病

- 予 想 発生量 : **やや多**
- 根 拠 (1) 4月下旬の発生量はやや多かった。(＋)
(2) 5月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 薬剤散布は発生初期から5～7日間隔で行う。
(2) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. 灰色かび病

- 予 想 発生量 : **やや多**
- 根 拠 (1) 4月下旬の発生量はやや多かった。(＋)
(2) 5月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 薬剤散布は発生初期から5～7日間隔で行う。
(2) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. ハダニ類

- 予 想 発生量 : **やや多**
- 根 拠 (1) 4月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 5月の気象は気温が高い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 多発すると防除が困難になるので、発生初期に防除を徹底する。
(2) 葉裏に多く寄生するので、薬液が葉裏に十分かかるように丁寧に散布する。
(3) ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一薬剤の連用を避ける。

－野菜、花きの共通害虫－

1. アブラムシ類

予 想 発生量 : **やや多**

根 拠 (1) 4月下旬の発生量はブロッコリーではやや少なかったが、花き類で発生量のやや多い地区があった。(±)

(2) 4月の黄色水盤トラップでの誘殺数はやや多かった。(＋)

(3) 5月の気象は気温が高く(＋)、降水量が平年並か多い(－) 予報である。

対 策 (1) 圃場をよく見回り、初期防除に努める。

(2) 黄色水盤トラップの誘殺数を病虫害防除所のホームページに掲載しているので、防除時期等を参考にした的確な防除を実施する。

(3) 定植時に粒剤処理または灌注処理を行う。

(4) 育苗床では、防虫ネットや不織布等で被覆し、アブラムシ類の飛び込みを防止する。

(5) 本圃では、シルバーマルチ、シルバーテープ、防虫ネット等を張るなどして、アブラムシ類の飛び込みを防止する。

(6) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(7) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. ネギアザミウマ

予 想 発生量 : **やや多**

根 拠 (1) 県予察圃場での4月下旬の発生量は多かった。(＋)

(2) 4月下旬の発生量はタマネギ、ニンニクでは平年並であったが、野菜類で発生量のやや多い地区があった。(＋)

(3) 5月の気象は気温が高く(＋)、降水量が平年並か多い(－) 予報である。

対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(2) 露地栽培ではシルバーマルチ、施設栽培では防虫ネットの展張や乱反射シートの敷設によって飛び込み量を減らす。

(3) 施設栽培では黄色または青色粘着トラップ等を利用して発生状況に注意する。

(4) アスパラガスでは、作物を手で払って虫見板上に落ちてくるアザミウマが散見される場合に、青ネギでは葉にカスリ状の食害痕が見られる場合に、早めに防除する。

(5) 防除後も表土中の蛹や葉肉内の卵により新たに羽化、孵化する場合もあるので、多発圃場では7～10日間隔で防除を行う。

(6) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

近隣農地の作物等や住宅地等での農薬飛散防止の注意が必要です。
風の状況を確認し、飛散のおそれがあるときは散布作業を中止しましょう

農薬はラベルをよく読んで使用しましょう

病虫害防除所 インターネットホームページ

URL:

<https://www.pref.kagawa.lg.jp/byogaichuboj/index.html>

